

2016 年度モンゴル活動報告

期 間：2016 年 8 月 21 日～24 日

場 所：ウランバートル

参加者：山本 裕子（国際委員会）、桜沢 貴俊（国際委員会）

モンゴル国の首都ウランバートル市内にある透析施設 7 施設へ視察を行った。

首都ウランバートルへは成田空港から直行便で 5 時間半、夏季はサマータイム制が導入されているため、日本との時差はない（通常時は GMT+8）。ただしウランバートルは標高 1,350 m、北緯 47 度と日本と比較してかなり寒い地域にある。夏は 30 度を超える日もあるが、冬はマイナス 30 度にもなる。気温の年較差、水質が硬水であることなどは透析治療に影響がありそうと感じた。言語はモンゴル語でキリル文字（ロシア語）、英語はあまり通じない。人口の約半数が首都に集中しているため、医療施設などの重要施設もウランバートルに集中していた。

JSTB 国際委員会としては今回が初のモンゴル国訪問であるため、視察目的はモンゴル国での活動の可能性を調査することだった。各施設では最初に透析室の責任者・スタッフに訪問目的を伝えた後、施設見学・質疑応答を行った。モンゴル国最大の透析センターを有する国立第一病院では Chuluuntsetseg Dorji 医師よりモンゴル国透析の現状についてプレゼンテーションを受けた。

施設見学では、実際に透析中の透析室および水処理装置を見学した。各施設、装置は海外からの支援で設置さ

れた比較的新しい装置を使用しているため、状態の悪い装置はそれほど多くないように見えた。ダイアライザは、現在は単回使用、感染性廃棄物の取り扱いや清潔区域に対する意識は非常に高い印象を受けた。全ての透析施設で日本の臨床工学技士にあたるエンジニアやそれをサポートするテクニシャンなどの専門職スタッフが勤務し、学会のような組織はないものの、エンジニア同士の情報交換は頻繁に行われているようだった。実際の透析治療は、国立系病院では週 2-3 回、保険適応で治療が行われていた。日本で研修を受けた医師もおり、血液流慮や透析液流量などの基本的な透析条件は日本と変わりなかった。ダイアライザや透析液の種類は限られていた。

質疑応答では、複数の施設のスタッフから装置メンテナンスの方法や透析条件の設定について質問されたことから、技術支援のニーズはあると感じた。水質検査に関しても質問があったが、国内のガイドラインがなく、検査機器が設置されていないため実施できていないことから、水質調査の必要性を感じた。

視察を終えて、モンゴル国において JSTB 国際委員会としての活動意義は十分あるのではないかと考えた。

